

「かんとんだよ！」 と、かんとんせんせいは言いはなつ

児童文学作家

斉藤 洋さいとう ひろし

かんとんせんせいは、まず、
「かんとんだよ！」

と言いはなつてから、
「では、一ばんかんとんなほうからおしえよう。」

と言つて、服をぬぎ、パンツ一まいになつてしまふのだ。

これはなんのことかと言うと、去年、つまり平成十八年に、講談社から出した幼年童話、『かんとんせんせいとペンギン』の話だ。

かんとんせんせいは世界中どこにでもあらわれる。つまり、世界漫遊の徒だ。そのかんとんせんせいを待ちかまえていたペンギンに、空を飛びたいと相談を持ちかけられたとき、かんとんせいせいは、

「かんとんだよ！」
と言いはなつ。

それで、このさき話がどうなっていくかは、本を読んでいただくことにして、それはともかく、実を言うと、そういう幼年童話の本を出しているくらいだから、私は、なんと言うか、いわゆる童話とか児童文学とか、そういうジャンルに入る仕事をしている。それで、そもそも、そういう仕事をするようになったのは、子どものころからの夢で……なんてことはぜんぜんない。きっかけは、今から二十一年まえの昭和六十一年の二月に、

へ小説を書くのは大変ですが、児童や青少年少女向けの童話や冒険小説なら、なんとかなるか。ねじりはちまきで「講談社児童文学新人

が、その中には、まあ、線一本で書けるものもあるにはありますが、よほど細い筆記用具で書かないと、五ミリのますに書くのはちよつとむずかしいような、複雑なものもありあります。」

と言われて、しかも、そのあと、溜め息なんかつかれて、

「やつぱり、ちよつと無理ですかねえ。数も多いからねえ……。」

とかつてくわえられたら、ほとんど絶望的な気分になつて、挑戦する気にはならないのではなからうか。

今思えば、ひらがなとかかなだけでも百くらいあるのに、あんなにおびただしい数の漢字まで、よくおぼえたものだ、われながら感心してしまう。それは、漢字をおぼえるのがどんなに大変かという前宣伝なしに、

「まあ、とにかくさ。ちよつとやってみようよ。それでさあ、数の1だけどね、これは横に棒を一本引けば、それで書けちゃうんだよ。でね、2はさ、もう一本……。」

とか言われ、

「あ、そうなんだあ……。」「と、まずちよつとやってみて、やりつづけてきた結果、千だか、それ以上だかの数の字を読み書きできるようになつてきたわけである。これ

は、私だけではなくて、日本で小学校教育を受けたたいの人間がそうなのだ。

であるからして、どんなことでも、やる前からむずかしさを強調するのは愚かきわりなく、たとえペンギンが空を飛ぶことでも、

「かんとんだよ！」

と言いきつたり、

「児童や青少年少女向けの童話や冒険小説なら、なんとかなるか。」

くらいなことを言つてしまったほうがいいのではないだろうか。

「むずかしいことに挑戦してこそ価値があるのだ！」

なんて、そりゃあ、そうかもしれないけれど、そんなふう言われても、やる気にはならないのだ、ふつうは！

そういうむずかしいことは、それなりに成長して、おとなになつて生活にも余裕ができて、そういう気になつたら、各自勝手にやつてもらうことにして、少なくとも青少年少女のうちは、へむずかしいなんていう言葉は禁句にしたほうがいいのではなからうか。さもないと、平気で、

「無理っ！」

と言いはなつ若者があつちこつちにあふれるようになってしまふ。

賞」に挑戦してみませんか。という「日刊ゲンダイ」の記事にめぐりあつたことだ。

私は、なんとかなるかもつて書いてあるんだから、なんとかならんじゃないか、と思い、『ルドルフとイッパイアッテナ』という作品を書いて、応募した。そうしたら、なんとかなつてしまい、それで、今もそういうジャンルの仕事を続けているのである。

この話をすると、

「そういう記事を見ても、ふつうは、なんとかなるかもつて思いませんよ。」

と言われることが多い。

それならというわけで、私は言いたい。

「これから文字を千ほどおぼえてもらいます

斉藤 洋（さいとう ひろし）

児童文学作家・亜細亜大学経営学部教授。1952年、東京都生まれ。『ルドルフとイッパイアッテナ』で第27回講談社児童文学新人賞に入賞デビュー。現代劇から、ミステリ、ホラー、SF、時代劇、ファンタジー、ナンセンス童話まで、様々なジャンルで質の高い作品を発表する。